

参加者：45名

1 堀江まちづくりコミュニティの活動と資金調達の秘訣

堀江まちづくりコミュニティ事務局補佐

鍵山 直人

助成財団センターの登録件数は登録されていないものも含めるとかなりの数が存在する。堀江まちづくりコミュニティでは、インターネット等から情報を得て、年間3～5件の申請を行っている。

堀江地区、高齢者中心に清掃活動をしている団体（愛風会）について発表をする。



どのような活動かという、堀江小学校の子どもたちと清掃活動や小学校の松の選定、北谷古墳の草刈り、福嶋キッズとしめ縄づくり等、子どもたちとかかわることを目的としている。学校と地域の連携、堀江地区は学社融合の理念で活動している。

わたしは、事務局補佐と堀江小学校 PTA 会長をしているが、愛風会会長から、みんなの時間が合わなくてなかなか一緒に活動できない、農家ではないので草刈機がなくて困っているという相談を受けた。堀江は農家が多いので声掛けすればいるかもしれないが、借りて壊れてもいけない。「堀江まちづくりコミュニティの方でなんとかできないか」と言われても事業をしているのでなかなか余裕がない。新たに寄付を募ればという案が出たが、すでにもらっているところが多く、新規にお願いすることは難しい。

そこで、民間の助成制度を利用することになった。検討した結果、一般財団法人セブンイレブン記念財団環境市民活動助成（清掃助成）がマッチするのではと思い応募した。

申請の方法については堀江まちづくりコミュニティお手伝い。愛風会の規約、名簿の整理、活動風景を写真に収める。結果、198,848 円の助成をいただいた。

また、私の勤めている松山市では、まつやま NPO サポートセンターがあり、助成金の申請アドバイス等をしているので困ったことがあれば相談してほしい。

助成をいただいて、草刈り機やその他清掃道具を揃えた結果、今まで活動しなかった人にも声掛けできるようになり、愛風会の会員数は増えた。活動を通じて交流を深め、そこで生まれた縁により、ほかの場所でも一緒に活動することにもなった。

課題は地域課題を学ぶことが必要。課題解決にはまちづくりの活性化につながる。課題を助成金で解決できるかどうか見極めが肝心ではあるが。

堀江の海の駅、助成金を取ってイベントをして、人集めをしようという話があったが、イベント

は一過性のもの。お金をかけないでイベントをしようと、社会福祉施設に手紙を書いて来ていただくようお願いした。すると、平日の来場者が増えた。なにもないけれど、それがいいと思える人たちである。地域課題がお金で解決できるものかどうか、見極めてほしい。民間には多くの助成があるため、情報の収集力が必要である。また、助成の内容が異なるため、細かな内容確認をして、地域の課題と助成金がマッチするかどうか、内容の確認がいる。

成果がわかるまで意外と時間がかかる。申し込みをして結果はすぐわからない。なかなか時間がかかるので、落ちた場合の対応を考えていなければいけない。同一条件で複数年にわたり助成されることは難しいので、そのことも考えて。

落ちてめげない。「いいことやっているのだからとれるよ」と出すほうは思うが、評価が悪くて落ちることもある。落ちて仕方ないとおもう感覚で出したほうがいい。

2 (株)WESYM の提案するもの 「伝えるを伝えるかたちに」

代表取締役社長 浅見 義治

新採の時、松山で働いていた。第2のふるさとだと思っている。クラウドファンディングの事業に関わって3年目になる。日経ビジネスで「日本を救う次世代ベンチャー100」として紹介された。

クラウドファンディング（英語：Crowdfunding）…不特定多数の人が通常インターネット経由で他の人々や組織に財源の提供や協力などを行うことを指す、群衆（crowd）と資金調達（funding）を組み合わせた造語である。

企画してイベントやりたいがお金がない。そんなとき、どうするか。ネット上に企画概要等を載せ、共感応援してくださる方から支援金をいただく。

震災が起こった時になにかしら寄付をした人はいるか、出し続けている人は果たして何人いるか。人としてその時はするが、何年にもわたっては難しい。1度、応援したら何がしかがもらえるとなると、応援してもいいよということになる。例えば、ぼろぼろの神社をきれいにしたいので寄付を募る。寄付をすると、神社に名前が書かれる。この手法と似ている。これをインターネットで募集を掛ける。

また、いろいろな決済手段があって、ポイントカード等のポイントをつかって支援することもできる。お金をくださいとはなかなか言いづらい方が多いが、余っているポイントを有効活用してください、いうならば言えるかもしれない。日本全国でポイント全部合わせると、1兆5千億円あると言われている。有効期限切れのポイントも年間3,000億円あると言われている。そのままきえてしまうのなら、活動に使うほうが有意義ではないだろうか。プリペイドカードを購入して支援していただいてもいい。ラジオ局 JWAVE 様や婦人画報社様とも事業提携をしている。

プロジェクトの例としては、「みんなでつづる本をつくりたい」という希望に、50万ほど集まった。ネットは日々更新され、アップしている。子どもができたときなど、アットホーム的な感じになる。



「かわさき折り紙、どれだけ長い色わっかをつくれるかプロジェクト」どうしてつくったか、川崎の地域に根差した色のわっかだったが、「七夕に向けて天の川」をつくったらどうかと提案があり、毎夏七夕の色わっかをいろいろな人がかかわって作っている。こんなイベントならお金を出してくださいといいやすい。

どうしたら新しい活動の種をみつけることができるか。「なければこまる」「あったらいいな」というもの、活動を知れば、これやろうよ、私もしたいなど、どんどん巻き込まれていく。まちづくりは「わたしもしたい」をどれぐらいつくることができるか。

公園付きカフェを気仙沼に作った事例もクラウドファンディングにはある。飛騨高山、職人が多いが外に出て行ってしまって、コミュニケーションがとれないということから、ワーキングスペースをつくった。立川出身のアーティストは赤い公園を作りたいという夢があったが本当につくった。閉館した映画館をなんとかしてもう一度したいという思いから、映画のロビーにバーを開店して新しい映画館になった。

成功したプロジェクトは共感できる物語がある、情熱あるチームで、飛び火して、宣伝部長となる外部支援者が必要。勝手に巻き込まれる方が必要である。

どれだけチームとして巻き込むか。「伝えると伝わる」は大きな違いがある。

自分が伝えたい情報を相手に伝えても、相手は自分の興味のあるものしか受け取らない。実際に伝わるのは、かぶっているところだけである。気持ちの準備と場の設計、適切な情報量があったうえで、相手が受け取ったかどうか。ありがちのパターンは、やれといわれてやっていること、相手には伝わらない。伝えたい自分の世界を押し付けているだけのことになる。

伝える5つの秘訣①内容②効果効能③他との違い④なぜ我々が⑤なぜあなたが うまく説明できることが成功の秘訣。どうしたら伝わりやすくなるのか＝同義付けをする。

報酬、昇進昇級、職務管理、機体評価、適職・仕事が好き、業務遂行、プライベート、人間関係環境整備、環境適応、人間関係、自己表現等。共感される物語、ストーリーはどのようにできるか。品質へ外見、鮮度、安全、物語、こだわり、歴史、共感等がある。

3 ダイアログシンポ「まちづくりが拓く学びの新たな可能性」

若松：お金の無いことを理由にしない、お金のことはタブー、生み出すことを知らない風潮。どううまく使うか。お金があればこんなこともできるという新しい発想。浅見さんの発想をきくと、どこかに落とし穴があるのではないかと思ってしまう。自己紹介を兼ねて民間、大学の先生、現場の各氏の話を知りたい。

杉崎：法政大学の教員をしている。教員になって2年目。都庁と京都でまちづくりの助成金のお手伝いをしていた。自治体の審査をするような立場だったので、見えてきたこととお話しできればと思う。また、助成金の申請を書く立場でもあるので、クラウドファンディングについても考えている。

まちづくりとお金という観点で考えると、お金には色がついている。外からお金を引っ張ってく

るときにどのような気持ちで引っ張ってきたか、自由に使ってもいいものなのか、そうでないのか、イベントをやるとかプロジェクトをするときに使ってもいいお金と組織の運営に必要なお金の使い分け、自分たちで集めなくてはいけないものかどうか、50万もらえば50万汗をかかなくてはいけない。今自分たちにとって必要なお金かどうか。今までのまちづくりで可能性を広げることができたか。どう使われるか、出した人の思いが反映されなかった。時間が大事である。クラウドファンディングはエントリーしてから集めるまでの期間に汗をかく。企画を充実させたり、ファンを作ったり、効果的に見せたり。やろうと思えば、苦でなくできる。助成金は取るつもりで企画を充実させるとか、募金箱をつくるとか、アナログでもいい。苦の経験が新しいまちづくりに生かされると思う。

時間をかけると深めることができる。企画書を書いて、実際もらえるかどうか、時間がかかる。クラウドファンディングだと、寄付が集まるまでの間に企画を考えることができる。面白そうな活動だと「私も参加するわ」とか、お金以外の人的なものも巻き込める。いいことやって、共感して実感できる人が増える。じっくり練りながらやるのが仕組みになっている。いろんな資源を巻き込むこともできる。じっくりやることの意義はある。しかしながら、お金って大事。お金がつながるゆえのあつい関係づくりだってある。お金の関係が本気の関係になる。そのような議論になってもいいとおもう。

浅見： 婦人画報さんと仕事をさせていただいたとき、インターネットに明るくない方々にも多くご利用いただき、通販と同じ感じのような使い方をしていただいた。結果として200万弱ほど集まった。

いいことしたら報われるというが、妬みにも変わりやすい。「誰がどのように稼ぐか」、その人の人生で自分には関係ないはずなのにそうはいかないようだ。普通のコミュニケーションとしてお金の話ができればいい。「あの人がやっているプロジェクトが楽しいから、気持ちとしてお金で支援する」対価が作れない場合は、経験値を作っていかなければいけない。いろんなお金の使い方、いろんな共感を求めていく。

いきなりなにもないところには集まらない。誰に共感されなくてもするのか、仲良くなるだけで成功するのか、一人だけでも成功するのか、同じ考え方だからよくて、違うから排除するなどという二元論的な方向ではなく、多様性を求めていくとよりよいのではないだろうか。

朝山： 桑原まちづくり協議会。40年ころから宅地化される。町内会に入っていない世帯も多数。自然開発等に取り組んでいる。愛媛大学農学部のサークルによるまちづくりをしている。自由にやりたいことをするというスタンスで参画してもらっている。

有志の会、町内会の30~40代の意見を吸い上げる、活動をする場として活動している。

保健福祉部は福祉マップをつくっている。桑原全体で、40万ほどかかる。事業費を計上しても足りないの、桑原地区の事業所の情報を載せて、病院や福祉施設から寄付をもらっている。現状は、松山市の助成金等いろんな補助ももらっている。まちづくり協議会からも補助金をもらい、防災品を購入した。青少年育成助成事業を立ち上げた。初めてのことは予算が付きやすい。中島のまちづくりと友好関係を結び、子どもたちを連れて行って中島の伝統工芸にふれた。困るのは、事業実施までに事業費がおおりてこない。実施日と補助金が出る日の調整がきびしい。助成金だけでは賄えないことも多い。問題の穴埋めをするまちづくり。将来的なみらいづくりのまちづくり、人材育成、

仲間づくり等。人材育成するうえで見つけていく。補助申請にチャレンジする人を見つけない。事務局としては、不足分を立案していくことも今後は必要。仲間を増やしていきたい。

若松：三者三様の話。問題の穴埋めが主流になって未来志向になっていないということだったが、100万あげるとしたらなにをしたいか。

朝山：ホームページ等は学生にしてもらいたい。学生をしながら、まちづくり協議会でお金を貰ってアルバイトしなくても大丈夫のようになればいいと思っている。世の中高齢化、高齢者が主流、学生を巻き込んだまちづくり、新しいシステムどのようなことができるか。

浅見：権限があること。学生のことなので「助けてください」ということであればやる気がなくなる。また、一部分の学生の能力だけ必要とするのもだめ。プロジェクトの責任者もすべて学生で。

杉崎：「誰かに頼まれて」だと、それなりの学生しか来ない。「場があるから任せる」というふうにならない。社会的な活動をしている学生も多い。主体的にやるというかたちで。お金なんか出さなくても、やりたいと思わせる。うまくつないで。大学の先生にお願いして学生を連れてきてもらってもつまらない。学生と直接つながるといいものが生まれる。それをクラウドファンディングにつなげて面白い。

朝山：学生が現在12人。そうなるのに、9年かかっている。大学に行って、30分話してひとりいるかどうか、ほとんど県外の子。南予の子の家はミカン園をしている。企画立案もしてもらおうかと思っている。簡単な発想から、自分たちの町につなげる。

若松：見せ方、伝え方はどうでしょうか。

浅見：伝え方は必要。お金とそこで働いている人、仕事が面白いかどうか、3つ揃ってれば、働きやすい。

杉崎：200人中4人来るとするのは、いい確率。先輩のだれだれが楽しそうにしていたとかいい。確実に集めている。1回の説明会でそれだけ集まれば。先生とのつながりもある。紹介はするが行くのは自由。あとは勝手にしてくれということで学生が選択できる、

朝山：将来的に学生になにを求めるか、こちらのほうもまだまだ未熟である。自分たちに何ができるかというスタンスでやっているのでもいろいろ考えてくれている。無料か私のポケットマネーでやっているが、学生が地域の人世代と話しをすることは少ないと思う。貴重な経験になる。まちづくりに生かせる。

若松：松山は若者が多い町。でも、まちづくりにはかかわらない。桑原が先駆的になればいい。話を聞いて、質問があれば。

関：地域活動を進める中で、お金を捻出するのにあずったことがある。平成16年、台風とか災害があって補助金を切った。地域のお金が0になった。地域の自治会費をあげて活動費に充てるかという案も出た。町づくりに思いを寄せる人には寄付してくださいとした。思いを持った人が奔走、100万ほど集まった。そのお金が生かされたような気がする。やろうとしたことに賛同した人のお金であれば、生かされるのではないかと思う。

溝渕：高松から2時間かけてバスで来た。2年前までは、コミュニティセンターで働いていた。高松市も補助金を出していた。500万持っている団体も、0の団体も併せてコミュニティセンターとした。会員からは月300円いただいている。人口増加の地域。90%以上の自治会を作るのはみんなの力。総会ですべてを見せて実感していただく。みんなで無視できないお金である。三谷地区では、

ためているお金をよりよいものとして。負担を少しでも軽くしていつている。時代の変化がわからないまま、活動していると、停滞してしまう。

杉崎：地域でお金を出してもらっているということで、緊張感をもって使っていると思う。行政的な監査などはない。新しいチャレンジは地域のお金で。自主財源なので、無駄遣いもしないし、こうしているよということが見えていい。

若松：クラウドファンディングをどのように知らせていくか。お金の取り方等どう伝えればいいのか。

浅見：お金を勝手に集める装置なのではなく、”お金”が”集まる”仕組み。そのあとが重要。難しいところがあるが、補助を目当てとした瞬間にそれは事業でなくなる。自分たち自身で自助努力が必要。

いろんなところで、村町が起こっては消えている。そのようなとき、どのような未来をつくるか、そのためにはどうするか、今あることを維持するにはどうすればいいか考えるのがよいのではないか。お金を出した人が関わってくれるので、自助努力が生まれやすい。それができない地域は淘汰されやすいかもしれない。必ず必要とされるものはあるので、胸をはって「私はこの町にいたい」と思える子どもを作ることが大切。

若松：困っているときにはお手伝いしてくれるのか

浅見：プロジェクトの背骨、骨子があることが必要かと思います。どうしたいか、こんなふうになりたいと思ってやってきたかどうか、これからどうしていいかわからないというとき。周りの人がサポートしたいとおもうかどうかかがカギである。

杉崎：インターネットを使った募金だと思えばいい。趣旨に賛同して、気持ち的に参加したいと思える寄付。地域によっては、クラウドファンディングを使って募金をしているところも。わくわくすることだから、汗をだす、お金を出す、ということ。地域のために東京で働いている出身者がお金を出すとか、「俺もお金出していたんだよ」とかいいたい。

若松：クラウドファンディングができるような人をどうつくるか。

朝山：地域に千本の桜が埋まっている山がある。中学生と一緒に植えた。市が作った展望台。どう守っていくか。クラウドファンディングを活用させてできるかなと思った。守っていくことも夢。できることなら、学生たちに企画立案させたい。学生は地域に帰って、できる方法を考えてほしいと思う。

浅見：見えないものに価値観を持っていく時代になってきている。「会場におられるみなさんが国をつくり担っている」なにかをつくりたい。未来をつくる。もう一回なにをつくれば、未来につながるか。誰もが信じていないけれど、自分自身が確信している。他でうまくいったことを聞いたがるのは、それは、どうすれば失敗するのかと同じこと。

杉崎：合意形成してまちづくりをしなくてもいいのではないか。やりたいように場を作る。やろうとしたときにできる、やりたいことをやってしまう、それを応援してあげるような地域。

若松：名刺をもってあるいているのだが、裏が真っ白なので生かしたいと思ったことがある。ホテルで社長の勉強会があったとき、裏が真っ白なのでコマーシャルしてくださいとお願いした。義農味噌の社長がのってくれた。会社の宣伝になった。そのことで世界がひろがった。お金は資金、小さな会社が大きくなるために必要なものとなった。

企業から無人島支援で 100 万円のお金をもらった。それ以来、その会社から 15 年間、30 万もらっている。この社長、94 歳、お断りをしようとおもったが、まだ若いというわれまだもらって

る。お金を差上げたいというところはたくさんある。どうしたらいいか、ということで今日はクラウドファンディングの手法を学んだ。このようなことをして、志を持った人をたくさん作っていく。

朝山：いい情報をいただいた。今年1年やる方向が見えた。どう活動につなげていくか、それが事務局の仕事。基礎にした活動母体を作っていきたい。どうして引き継ぐか、去り際を清くと思っている。

浅見：100年後、町の発展に対してどうかかわっていれば理想なのかを考えることは肝要かと思います。やり続けると成功をおさめる。菊池寛の本で30年間洞窟を掘る話があった。やり続けることが本質。まちに還元していけばいい。

杉崎：久米地区の活動をみてきた。2,3年で1つの目玉。その時期課題だなと思うことをしている。動きが速いので前例がない。3年くらいでけりをつける。どこも共通している。これからの課題をクラウドファンディングでやると話題性になる。外からの共感も得られやすい。

変革のプロセスで人が育ち物語が生まれていく。

